

氏 名	崔 建 植
学 位 の 種 類	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 5040 号
学位授与年月日	平成 19 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
学 位 論 文 名	上代人名における命名研究
論文審査委員	主 査 教 授 毛 利 正 守      副 査 教 授 丹 羽 哲 也 副 査 教 授 栄 原 永 遠 男

### 論 文 内 容 の 要 旨

本稿は、現代日本で行われている人名運用の源流を辿り、その命名のあり方から導かれた諸相につき言語学的視点に立って考究しようとしたものである。そのため、上代における第一次資料として重要とされる籍帳類に記載されている多量の人名を始めとし、古事記・日本書紀などに現れる人名を対象にして考察を行った。萬葉仮名で綴られている上代人名における単独例からは、その語義が十分に把握できない場合がかなりあるように思われる。そういった場合は、籍帳における家族関係を考慮して掛かる必要があるだろう。なぜなら、そうすることで単独例では解けなかった人名の内容が明らかにされることが多いからである。本稿では、そうした家族同士における意味の連帯（連鎖）や序列・続柄などから連動される事柄を手がかりにして、上代人名における語彙・表記の問題を始めとして、命名本来の役目である個体識別のための「対比命名法」についての所説を試みた。以下、第一部～第三章からなる本稿の内容（構成）を簡略に紹介すると次のようである。

第一部（第一章～第四章）では、上代人名における命名研究の第一として、籍帳に現れる人名表記を意味連鎖から検討し、語彙や表記の諸相について述べた。また、籍帳人名における対比的命名法の様相につき、序列に関わるものを切り出しにして、連体助詞の「つ」とその拡張として他の一音節形態素に広げて考察を行った。

第二部（第五章・第六章）では、上代人名における命名研究の第二として、第一部の第三章・第四章で行った籍帳人名における対比命名法を受けて、古事記・日本書紀に現れる長幼の序列や一音節形態素による対比的命名法について考察を行った。

第三部（第七章～第九章）では、上代人名に関わる周辺的な二つの問題について検討を行った。その一つは、第二部第六章で提起された清・濁による対比例における命名用字と、清・濁対立の音韻論的立場とどう関わるのかについて、その基礎的な作業として、上代における係助詞「そ・ぞ」の清濁の問題と、日本書紀歌謡における清濁表記の検討、さらに濁音節における濁子音の音価の問題を追及してみた。もう一つは、第一部第三章で考察した連体助詞「つ」と、籍帳や古事記・日本書紀などに現れる「つ」の異形態表記の問題について考察した。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、上代人名における命名のあり方を言語学的視点に立って考究し、その諸相を実証的に明らかにする研究である。

第 1 部「上代籍帳の人名における命名研究」の第 1 章は、上代籍帳には膨大な量の人名が萬葉仮名で書き留められており、それらの人名に家族構成員の続柄が明示されるものが少なからず認められることによって、相互間の命名における意味上のつながりを活用しつつ、人名の語義を明らかにすると共に、当時における日常の口語が反映されていること、またことばの過渡的な様相を呈していることを解明するものである。上代日本語

における多様な語彙の面々を、家族間の人名表記にみられる意味連鎖を手掛かりに導き出されたものであり、きわめて大きな意義を有するものである。なお、多数の語彙が観察できるにも拘らず、依然として籍帳人名という資料の限界性もあるために、制限的な人名語彙とならざるを得ない面もあり、これを克服するには、資料的性格を異にする他の作品における人名表記の調査も更に追究していることが今後に望まれる。

第2章は、籍帳には、同一の人名に対する重出表記や、同じ戸口の家族間・親族間における人名表記や隣接戸口の人名間にみられる音仮名から正訓字（正訓字から音仮名）連鎖による音訓交用の表記例が多数現れる。こうした形式が籍帳人名における表記上の一つの特徴であることを見届け、その上で、同様の形式が古事記や日本書紀からも観察できることを論じて、資料的性質を異にする両文献の連続性を見定めているところに、本章の価値が認められる。また、音訓交用表記及び二合仮名・連合仮名、添記・略記などの表記形式がみられる多様な命名用字についても精緻に且つ総合的に分析していて注目されるが、ただ、音訓交用表記は口頭語では識別要素にならないこともあって、今後、実際の言語生活の場と、記録として残された文献上の場の両者を見極めていくことも期待される。

第3章は、古代日本における籍帳などの古文献を調査して、そこに見出される人名中の連体助詞「つ」の様相につき、主として対比的命名法—親子間あるいは兄弟姉妹間の同一家族共同体内部における個体識別のための命名法—を手掛かりにして、連体助詞「つ」の人名での機能を探り、それが一般名詞における連体助詞「つ」といかなる関連を有するかを探る論である。人名中の連体助詞「つ」の一部に、一般名詞にみられる格関係表示機能をもつものが存する一方で、個体識別上の形態素となっているものが存在することを明らかにする論であり、今までにない新たな視点からの画期的な成果として高く評価できる。

第4章は、第3章の拡張として連体助詞「の」「な」（「の」の交替形）、さらに対比的命名に用いられるすべての一音節形態素にまで考察の対象を拡げ、文法的な要素・語彙的な要素が共に個体識別に関与していることを論述する。連体助詞「つ」以外の「の」（な）においても、人名での識別要素となっていることを指摘し、更にタ・ヤ・ラなど情態言を形成する接尾語と同様の形をとる一音節形態素も家族間の個体識別上の語構成要素となっていることを明らかにするとともに大きな意義が認められる。

第2部「古事記・日本書紀の人名における命名研究」の第5章は、古事記・日本書紀の命名に、籍帳ではほとんどみられない「中」が存することに注目し、その「中」が同じく序列性をもつ「弟」と呼応していること、それに対して美称性を有する「若」の場合は、「大—（小—）若」という対応において、美称性から序列性へと変容していることを見届けた章である。命名法の類似点と相違点を具体的に分析しており、説得的な創見の論であると言え、同時代の資料である木簡や金石文における人名との相互比較の検討へと更に進めていくことが期待される。

第6章は、古事記・日本書紀に現れる人名を対象として、一音節形態素の有無による対比的命名法の様相を分析し、籍帳と類似する在りようを確認すると共に、人名以外の一般語彙でも、一音節形態素は、和歌では対照の強調を図る修辞法の一つとしてあること、また単音節語から多音節語化へと語形の派生が行われることが語義弁別ゆえであることを証して、それと人名における個体識別とが類似の様相にあることを具体的に説き明かしており、本論の創見として高く評価できる。

第3部「上代人名に関わる周辺的な問題—清濁表記と連体助詞「つ」—」の第7章は、第6章で提起された清・濁による対比例における命名用字と、清・濁対立の音韻論的立場とがどのように関わるかについて論述している。係助詞「曾」を清音の「そ」と想定し、濁音形はその連濁形と見做してよいこと、また、日本書紀歌謡における清濁表記を精査して、濁音声母の字が同一歌謡において清・濁両用の表記例としてみられることを詳細に論じる。こうした考察は、従来、清・濁の対立が音韻上の区別によるものとする一般的な解釈を見直すものであって、貴重な成果と言える。古事記や日本書紀のように編者が漢学・漢字音に精通した識者層の場合は清濁表記が厳密に行われ、籍帳のように下級官吏等の手による場合にはそれほど厳密ではなかったのでは

ないかといった資料の位相の問題も今後の課題となる。

第8章は上代における清濁問題を考えるにあたって、濁音節に含まれる濁子音の音価について、上代から中世に至るまでの変遷の跡を辿るものである。中世における諸外国資料や仮名遣書などの記述によると、いずれも濁音節に鼻音的要素のあったことが見出されるが、これを中古・上代に遡って追究するのが本章である。上代文献における鼻濁音の仮名使用分布及び上古音ア韻と推定される仮名使用の状況から、上代でのガ行音節に鼻音的要素の存在していることを見定め、以降、中古・中世に至るまでの濁子音における鼻音的要素の存在・盛衰及び音価の変遷を総合的に見据えたところに意義が認められる。

第9章は、上代人名に多用される連体助詞「つ」の異形態表記と関わる問題を中心に追究するものである。連体助詞「つ」と同じ役割をもつ連体格の「し」のほかにも籍帳や古事記・日本書紀などの上代文献に、「つ」の異形態表記とみられる「た・ち・て・と・と」（濁音形を含むものもある）などのタ系の表記が現れる。山田孝雄『奈良朝文法史』で、連体助詞「つ」と、古代韓国語における助詞「し」と同原ではないかという可能性を示唆しているが、本章では日・韓両国語におけるこれらの助詞について双方の古代資料から得られる用例を踏まえて、構文論、音韻論、用字法の三つの観点から、両者に緊密な関連性のあることを論述し、山田孝雄が発案した所説を両国の文献を精緻に検討することによっておし進めたところに意義を有する。日・韓両国語における同機能を遂行するこの助詞の同源説を主張するには、同時代の文献における用例を比較研究することが前提になるが、日本側に比べて韓国側には古代資料が不足している状況にあり、現在、日本書紀における古代韓国関連記事にみられる人名・地名などの固有名詞や三国史記・三国遺事における地名などがその主たる研究対象となるものの、韓国側の金石文などにみる固有名詞表記や、現在、木簡などの新資料が両国で発掘されており、資料的制約を補える日のくることが期待される分野でもある。

最後に、本論文における課題であるが、それは、籍帳に記される家族構成とそれに対する実態との関係、つまり籍帳の内容が実態をどこまで反映しているかの配慮についてである。こうした点に問題を残すが、全体として従来の研究を推し進めると同時に、未知の分野をも切り拓き、また日本上代語にとどまらず、古代韓国語にも拡がりをもつ論であり、本論のいくつかは、日本のレフリー付きの高いレベルにある学会誌にも掲載されて評価を得ていることから、学界に裨益するところの小さくはない論文であると言える。

以上の所見により、本論文は、大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。